

萩原雄祐先生を悼む

弔 詞

半世紀にわたってわが国の天文学の世界に君臨し続けて来られた萩原雄祐先生は、去る1月29日、享年81才をもって御他界されました。永年の間多くの事を教えられて来た私共にとりましてはまことに哀惜の念耐え難いものがあります。

先生は若くより終始理論天文学の泰斗として、御活躍になり本来の御専門の天体力学のみならず当時勃興した量子論、それに伴う天体物理学の発展を常に精力的に吸収され、わが国における本格的な天体物理学の発展の基礎をお作りになりました。

先生は大正11年東京帝国大学を御卒業後、ただちに同大学に御奉職になり、昭和32年に御退官になるまで理学部天文学教室に籍をおかれ、その間昭和21年以降11年の長い間、東京天文台長をお務めになりました。東京天文台長をお引き受けになりましたのは終戦直後で、わが国としましては最悪の状態の時にも拘らず、天文学の発展のためという一念で種々の困難を克服され、技官制から教官制への移行、188cm反射望遠鏡を主力とする岡山天体物理観測所の建設計画等数々の目覚ましい業績をお挙げになり、東京天文台の面目を一新されました。その後、現在に至るまで東京天文台で推進して来ました諸計画も大半は萩原先生のお考えの中にあつたものであると言っても過言ではない位であります。

先生はまた戦後の荒廃期に日本天文学会の理事長をつとめられ、わが国の天文学の再興に大きな力とられました。

先生のもう一つの業績は、国の内外に実に多くの立派な弟子をお作りになったことでもあります。先生の御専門が多岐にわたっていると同様、その弟子の方々も天文学のあらゆる分野で活躍しておられ、弟子の量及び質におきまして先生はまた世界中でも類まれな大先生であつたと言えましょう。

先生は若くしてケムブリッジ大学、ハーバード大学に御遊学になり、常に国際的視野に立って物事をお考えになり、国際天文学連合の副会長、分科会委員長等も歴任され、国際的にも天文学の重鎮としての役目を果されま



した。東京天文台長御在職中は先生の貴重な御研究を一切抛って行政に没頭、御奮闘なさいましたが、御退官後は天体力学の御研究および著書の御執筆に専念され、10数年をかけて5部より成る天体力学の英文著書に心血をそそがれ、3年前ようやく完成されました。最後の大事業を完成させてから御他界なさいましたのは先生としては御満足であつたことと思ひますし、私共としましてはせめてものなぐさめであつたと存じます。

私個人の感想と致しますと、学生時代から今日に至るまで、終始先生のお世話になって暮らして来たという感じではありますが、恐らく同様の御感想をお持ちの方々が私以外にも大勢おられると思ひます。これも先生の偉大さであるように思ひます。

長年にわたって、わが国の天文学研究者の心の支えであられた先生に去られまして悲しい気持ちで一杯ではありますが、先生の遺志を継いで天文学の将来の発展のために努力することを誓ひたいと思ひます。

昭和54年1月31日

日本天文学会理事長
東京天文台長

末元善三郎